「科学する心×いのち真ん中社会」

自然との出会い

～乳児クラスでの実体験と再発見の学び～

遍照広尾保育園　竹内　佑之介

このゼミに参加したきっかけとなる保育の中の疑問

「自然物との関わりは何故大切にされているのか？」

普段からどんぐりやまつぼっくりなど、当たり前のように季節の自然物との関わりを持つ保育園生活の中で、「なぜ自然物との関わりをもつのか」という疑問を抱きました。なぜなら私の保育園に園庭はなく、都会の真ん中にあるので、森や海、川が近くにある保育園と比べると自然物との関わりが極端に持ちづらいからです。

自問自答を繰り返す中で、私自身は自然が大切というのは漠然と分かっていても答えが出ずにいました。

そんな中でぐうたら村の研修に参加する機会をもらうことができ、ぐうたら村のゼミでは

「自然を大切にするだけでは間に合わない時代になっている」

「人間が関わらないものが自然ではなくて、人間も自然の中にいる」

「今までと同じ保育や教育では今世界で起きている問題の再生産になるのではないか」

という三つの考え方に強く心を打たれ、ぐうたら村の中で自然のつながりを感じました。

遍照広尾保育園

遍照広尾保育園は恵比寿で開園４年目の保育園。

園庭はなく、自然とのつながりは感じにくい。

また、身近で自由に使える山や海はない。

散歩先は駅の屋上だったり恵比寿ガーデンプレイスだったりと笑ってしまうほど都会な環境で自然の営みを感じられるのか？正直この環境では意識してつながっていかないと触れる機会すらなくなってしまう。危機感を覚えました。

そんな中でもぐうたら村で学んだ自然のつながりを少しでも感じてほしいと思い、子ども達の思いを拾いながら実践につなげてきました。

実践

初めは子どもが拾ってきた落ち葉からでした。

実際に室内に落ち葉を置いて観察したり触ったりして遊んでみました。匂いや感触での楽しみの段階です。

置いてあるだけで子ども達は自ら自然物に興味を持って触れようとします。

公園で落ち葉を拾って帰って遊ぶのがブームになっていたある日、「虫さんいるかな？」と重なった落ち葉を見て話す子どもの姿がありました。

2歳児にとって身近な“虫さん”とのつながりが見えました。

テラスや屋上で落ち葉を使って遊びながら虫さんのおうちづくり。探り探りでも簡単な落ち葉コンポストを作ってみると、プランターの下にはダンゴムシをはじめとした幼虫やミミズなどの虫が集まってくるようになりました。

子ども達の活動の様子を見ていると、子ども達は自分から自然に関わろうとします。大人がどれだけ機会を作れるかがこの子ども達にとっては重要なのではないかと考えます。

自然物に触れるだけでなく、更にその興味を他と関連させてつなげていくことで、科学する心を元に、いのち真ん中を捉えやすい。

虫が実際にいることが目に見え、屋上という環境で他クラスとも交流が持てました。

しかし、落ち葉を使って簡単な虫との出会いは見えたものの、

正直落ち葉は外の公園や道に落ちているもの拾ってきたもの。この保育園内でのサイクルはありません。

そこでこの保育園での持続性、サイクルを考え直した時、屋上の雑草やアサガオのツルなどの枯草を使って遊んでいたことを思い出しました。

元々捨てられる予定だった木枠、放置されていた栽培物の葉っぱや茎、余っていたカブトムシの土などを混ぜながら作っていきました。

捨てられるはずだったゴミ２袋分が、次の土へ。分かりやすい成果として大人自身が楽しみました。

大人も科学する心を忘れない。

落葉樹を急に取り入れるのは難しい。それなら今あるもの、捨てるもので活用していきます。

前回落ち葉の時に虫が集まってきていたことを体感している子ども達は自然と「虫さんにあげる？」「これはミミズさんの〜」と言って散らばった枯草を集めていました。２歳児でもその機能をなんとなく感じているということ。

枯草コンポストを通して、見えなかったものが見えるようになった。

公園で木の実を見つけると「屋上に持っていく？」と話すなど、子どもたちにとって屋上が自然との出会いの場になっていました。

米ぬかの感触や枯草の触り心地を実際に感じながら作っていくと子ども達の「やってみたい」がたくさん出てきます。「これもやってみる？」と、次のやってみたいが大人を追い越す。

「こうしたらどうなる？」「やってみたい」というまさに科学する心を目の当たりにしました。

これから子ども達が幼児クラスになり、この土を使って栽培したりまたその栽培物の遺体を土に戻したり…という小さな循環に期待しています。

二歳児では今は土を作っていると分からなくても、来年度、再来年度、またその先の年齢で子ども達にとってはこの経験が生きてくるはず。

公園での実践

公園では、雨の日の翌日にできていた水たまりを見つけ、入ってみたいという子ども達。

なんでも実体験。実際に入ってみることにしました。

「思ったよりあったかい」「足がドロドロになった〜」と実際に体感したからこその発見がありました。

子ども達はそれから毎回公園の水たまりをチェックするようになり、晴れている日には「水たまりなくなってるじゃん！」と話すなど、今まで当たり前だった水たまりその物に目を向けられるようになったのです。

そしてある日、鳩がその水たまりの場所で水浴びをしている場面に遭遇します。子ども達は

「(前、思ったより温かかったし、鳩も）あったかいんじゃない？」

「(僕はどろどろになったけど）足大丈夫かな？」

「(僕たちと違って）お水飲んでるんだ」

と自身の経験を元に鳩の行動を捉えます。

他にもこの自然を使っている生き物がいるということの気付きが得られ、実際に子ども達が経験したからこそ、自分とは違う存在が気になったのだと思っています。

実践を経て考えた今の考え

自分の身の回りの自然を実体験したことによって、見えなかったことが見えるようになるということは、自分の周りの存在や問題に目を向けることができるようになるということ。自分やヒト以外の存在をどう捉えるか。これこそ科学する心を通して、いのちを真ん中に捉えるということなのではないかと考えます。

特に私は担任クラスである２歳児を中心に実践してきました。

自分以外の環境を自らの経験で知ろうとする乳児期に、"自分以外の生き物(動植物)も自分たちと同じ環境を利用して生きている"という感覚を感じられたという事に今回の実践の意味を見出しました。いのちまんなか社会を感覚として知ることができたと言えると思います。

大人になってからこの感覚を学ぶには、改めて様々な感覚を体験する必要があるかと思いますし、一度持った感覚を変えるのは時間のかかることと思います。

今回の実践で自然と関わる子どもの姿はイキイキとしていて、こうしたらどうだろう、こうしてみたい、というまさに科学する心が育っていると感じました。

まだまだ小さな実践です。私は、子ども達の科学する心に気付き、共感できる心をぐうたら村で学びました。小さなところから、気付きから、大人の心が変わっていけば、子どももきっとたくさんのことを感じ取れると思います。

よりよい未来に向けての保育が進んでいくように取り組みの輪を広げていきたいです。

何故科学する心、いのち真ん中

そして持続可能な社会のために自然を取り入れるのか…

- 自然から語りかけてくることの多さ
- 知識として知ることよりも体感すること
- 自分の周りの存在（問題）に目を向けること

これから先で学びに向かう力の土台となる。